

1970年代、私は高齢者の活動と社会参加の重要性について考え始めました。

私はそれについて著書である“Why Survive? Being Old in America”（邦題『老後はなぜ悲劇なのか アメリカの老人たちの生活』1975年刊）に詳しく書きました。

また私が“Productive Aging”という概念について直接に公の場で話したのは、1983年オーストリアのザルツブルクで開催された歴史的なセミナーにおいて、議長を務めた時が最初でした。

私はセミナーの参加者に、高齢期における依存をめぐる問題について話し合いを求め、“Productive Aging”という概念は、加齢のよりポジティブな面を考えるための重要なステップとなるだろう、と述べました。

ザルツブルク・セミナーには、偉大なスウェーデンの老年医学者、Alvar Svanborgをはじめ、老年心理学のパイオニアJames Birren、女性の自立に関する有名な“The Feminine Mystique”を書いたBetty Friedan、ザルツブルク・セミナー事務局のHerbert Gleasonなど、多数の著名な仲間が参加していました。

私は彼らと参加した多くの人々に対して、加齢についてはもっとそのポジティブな側面を考えるよう、強く奨めました。

私は“Productive Aging”を狭い意味でとらえることは、間違っていると思います。病床にある人でもプロダクティブで、彼らの介護者の役に立つこともあり得ると考えていますし、自分自身のケアは十分にプロダクティブなことがらです。

“Productive Aging”の主要な概念は、より大きな社会と自

分を取り巻く人たちとの関係において、可能な限り積極的であるということです。

もちろん社会の側も高齢であることに敬意を表し、高齢者が周囲の環境と積極的な関わりを持てるよう、できるだけ多くの機会を提供すべきであることは言うまでもありません。

しかし、“Productive Aging”が単に「仕事」としてのみ見られるならば、それはあまりに矮小化されたものであり、私の意図するものではありません。

私は、個人と社会の精神のあり方について語ってきたつもりです。

この概念の将来を考えると、単に職業としての仕事だけではなく、ボランティアやNPO活動、家事や自分自身のケアなども意味する“Productive Engagement”の方が、よりふさわしい言葉ではないかと考えるようになってきました。

いずれにしても私の変わらぬ願いは、高齢者が自身の尊厳の保持、生活と長寿におけるQOLの改善を目指して、積極的に社会に参加し、社会と関わりを持ち続けることであります。

その意味では、トップランナーとして世界をリードする日本の多くの高齢者が、「生きがい」をもって社会と関わりながら、充実した日々を送ることは後に続くものの理想であり、また目指すべき目標となります。

日本の高齢者がこれからも素晴らしいお手本を示してくださることを、大いに期待しています。